岳武士の中で西部における中堅であった。

第三節 災害

吉野川流域の地名を調べてみると、その旧呼称が現状といちじるしく異っていることに気がつく。これは吉野川の大洪水によるものである。[注1~2]

したがって中世――近世までも住民は山腹や丘陵地に住み、水害を免かれることに工夫し努力した。盛り土や石垣をもって高めた所に宅地を構え、その上にさらに高い地盤を積み上げて、家の出入には数階の階段を昇降する不便をしのんだり、屋根うらに洪水時用の格納庫様のものを設けている。

また邸宅の周囲には竹藪や雑木林を作って洪水や流木が直接に激突することを防いでいる。

ここに年代は明らかでないが旧地名河道の跡を示す口碑等をたよりとして吉野川の美馬郡以東の旧河道想定図をかんがえる。(三五五ページ地図参照)

一 洪水

日本凶荒史考には、平安末期の久安六年(一一五〇)、風水によって諸国が飢荒したことが載っており、翌、仁平元年(一一五一)正月廿六日には、「近江・但馬・伯耆・播磨・備前・備中・安芸・淡路・阿波・讃岐・土左等国司申依二失損一、被二免除一去年済物一事」が、本朝世紀に見えている。

中世の記録に、徳治二年(一三〇七)六月中旬に那賀川に大洪水があり、和食の無量院加藍と本尊共に流亡した時元応元年(一三一九)九月十七日再興したことが薬師如来の裏板文がある。[注3] 恐らく吉野川にも同様大洪水があったと想像

される。天正七年(一五七九)八月、「大水去らざること三日、人畜多く死す。」「天正十年(一五八二)九月五日、阿波国大洪水、翌十一年、十二年、大水と「阿波志」にある。ことに、天正十年は、長宗我部元親の大軍が阿波に侵入してきて、十河存保を板野郡勝瑞城に攻め、中富川の激戦があり、その夜(九月五日)洪水が押寄せ、吉野川の大洪水は当時は現在と河道がちがっていたため、まともにその被害をうけ、経験のない土佐軍は、意外のできごとに混乱し、水に溺るるもの流れて行方も知らずなる者、民屋に上り梢に上る等の記事が「三好家成立之事」(群書類従本)に見える。

保暦間記にある文治元年(一一八五)二月十八日、屋島を攻める源義経の軍勢が、摂津渡辺浦から、三日に渉る海をわずか三刻で押し渡り尼子浦に上陸したということも、この時暴風雨に乗じたことが察せられる。

二 地震・海嘯

災害には、この他に、地震およびそれに伴う海嘯がある。光孝天皇の仁和三年(八八七)七月三十日には、五畿七道の諸国、地大いに震う(大日本地震史料)とあり、参考太平記によると、正平十六年(北朝の康安元年——一三六一)辛丑の七月廿四日、南海道沖の大地震と海嘯で、海部郡雪の湊(由岐港か)の千七百戸ことごとく海に沈み、在所の僧俗男女牛馬犬鶏残らず底の藻屑となり、鳴門の潮が涸れたと伝え、室町時代の文明六年(一四七四)冬、阿波国大地震、明応七年(一四九八)六月十一日にも大地震があり、永正九年(一五一二)八月には、暴風雨による海嘯洪浪のため、海部郡宍喰浦中残らず流失し、わずかに三分の一のみが助かったと「宍喰浦旧記」は伝えている。(阿波海嘯誌略—昭和十一年刊—徳島県出版)

さらに「阿波志」の記載に従うと、「天正十二年(一五八四—蜂須賀入部の前年)十一月廿九日、地大いに震るい、年を踰えて止まず、地の裂けるところ数ケ所。」と見えるから、豊臣秀吉の四国征伐(天正十三年六月)の前年、阿波には大地震があった事が判かる。また、文禄三年(一五九四)八月六日阿波国に大地震があり、その時お亀磯が陥没したが、後の安政の地震までは干潮時に礁頭が水上に見えたという。(勝浦郡志)この時のお亀磯の陥没で、それまでそこにあった社や寺は他所へ移転したといい、徳島市福島の四所明神・徳島市八万の潮見寺はその時移転してきたものと伝えている。

三 火災

火災の記事はすくないが、日和佐薬王寺では、文治四年(一一八八)火災にかかり、寺宝一切烏有に帰したとあり、これは中世を通じて残るただ一つの火災の記録である。

四 旱害・悪疫

近衛天皇の仁平三年(一一五三)「京畿旱諸国異損あり」と(日本凶荒史考)見え、阿波志にも翌年に当る久寿元年(一一五四)五月乙亥「去年稼穡登らざるを以て租を免ず」とあるが、阿波志のこの災害は旱害であった事が判かる。

また、悪疫の流行も今日の人の想像を絶するものである。室町時代の応永三十一年(一四二四)阿波国では飢から起こる疫人多く、往々村を挙げて無人になった処すらあると古記に見え、阿波志には、「天正八年(一五八〇)春大疫、夏に至りて止まず」とあるから、勝瑞の衰頽、阿波国の秩序も乱れ、餓孚道に横わり盗賊横行した状況が偲ばれるのである。